平成３０年度第２回総合教育会議　会議録

日　時　　平成３１年３月１８日（月）午後４時３０分
場　所　　市役所本館３階　対策室１
出席者　　新潟市長
　中原　八一
教育委員会
　教育長
　　前田　秀子
　委員
　　佐藤　久栄，沢野　千英子，上田　晋三，田中　賢一，
　　渡邉　節子，山倉　茂美，小野沢　裕子，市嶋　洋介

事務局出席者　市長部局
　地域・魅力創造部長　井崎　規之，政策調整課長　野坂　俊之
教育委員会事務局
　教育次長　高居　和夫，古俣　泰規，教育総務課長　渡邉　剛
関係課等出席者
教育委員会事務局
　学校支援課長　齋藤　純一 ，学務課長　高橋　光久

議　題
　（１）平成３１年度教育施策について

第１　開会	
○司会（地域・魅力創造部長）	定刻となりましたので、これより平成３０年度第２回総合教育会議を開催させていただきます。 冒頭の司会進行を務めさせていただきます、地域・魅力創造部長の井崎と申します。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。 本日は、平成３１年度教育施策をテーマに、将来、子どもたちが自分の夢を実現する力を身に付けるために必要な学力向上などについてご意見を頂戴できればと考えております。 また、本日は、中原市長就任後、初めての会議となりますので、市長には教育に関する基本的なお考えなどをお示しいただいたのち、意見交換をお願いできればと考えております。 それでは、ここからの議事進行につきましては、市長にお願い申し上げます。よろしく、どうぞお願いします。
第２　議題	
○市　長	それでは、私にとって初めての総合教育会議となりますので、議題に入らせていただく前に、若干時間を頂戴し、私の教育に対する基本的な考えを述べさせていただきます。 まず、私は子どもたちが、将来、自分の夢を実現するためには、基礎学力の向上が夢の実現の第一歩になると思っています。これまで本市では、平成１８年に策定した新潟市教育ビジョンの基本方針である「学・社・民の融合」による教育を掲げ、すべての市立の小中学校等に地域教育コーディネーターを配置し、多くの学校ボランティアの皆様の協力を得ながら、地域に密着した教育をはじめとした取組みや、教員の授業力向上に向けた取組みなどにより、全国学力テストにおける子どもたち、特に小学生の成績が向上してきたと認識をいたしております。 将来、子どもたちが自分の夢を実現する力を付けるためには、２０２０年の学習指導要領の改訂を見据え、英語教育やＩＣＴ教育などを推進するとともに、幼・保・小の連携や、小中学校の切れ目ない教育を進め、さらなる学力の向上に取り組んでいただきたいと考えています。 また、新潟の素晴らしさや魅力など、地域への愛着や誇りを持つ子どもたちの育成に向けて、食育や農業体験学習といった新潟らしい教育のほか、児童・生徒の健康と学校施設の教育環境の確保のためのエアコン設置や、教員の多忙化解消に向けた取組みを進めるなど、子どもたちが健やかに育つ教育環境の整備を推進していきたいと考えています。 また、昨年の１２月議会でもお答えしましたが、平成２７

	年に教育委員会と市長が協議の上策定した教育の大綱および現行の教育ビジョン第３期実施計画について、２０１９年度末までを期間としていることから、現行の教育の大綱を尊重させていただきながら、来年度検討を行う教育ビジョン次期実施計画の方向性と整合性が取れるよう、次の教育の大綱について、来年度の総合教育会議の中で協議をさせていただきたいと考えています。 　それでは、議題に入らせていただきたいと思いますので、「平成３１年度　主な教育施策について」、事務局から説明をお願いします。
○事務局（教育総務課長）	教育総務課長の渡邉と申します。資料１に基づきまして説明をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。 　資料１をご覧ください。本市の主な教育施策は、資料の一番上に記載のとおり、にいがた未来ビジョンにおいて、都市像Ｉ「市民と地域が学び高め合う、安心協働都市」の政策３「学・社・民の融合による教育を推進するまち」に位置づけられています。その位置づけの中で、平成３１年度の教育委員会の当初予算にかかわる施策、事業を新潟市教育ビジョンの体系とリンクさせて表記したものがこの資料でございます。 　平成３１年度は、各施策、事業の実現に向けて、左上の四角で囲まれておりますが、「学力の向上に向けた取り組み」、その右隣の「より質の高い教育に向けた取り組み」、そして下段の「働き方改革・環境整備」の三つの大きな柱を据えまして、事業を展開してまいります。なお、それぞれの柱の中に色が付いた四角い枠がございますけれども、これが新潟市教育ビジョンの項目となっております。そして丸枠がありますが、その丸枠はそれぞれの取組みを表しているものでございます。なお、太線になっている丸枠もございますけれども、これは市長の１０の約束に挙がっているものとなってございます。 　それでは内容についてご説明いたします。 　はじめに「学力の向上に向けた取り組み」です。その１、青色の帯でございますが、「確かな学力の向上」、そして「創造性に富み、世界と共に生きる力の育成」として、学力向上やアフタースクール、外国語教育など、学力の向上に向けた事業を実施します。これらについては、のちほど学校支援課長より詳細の説明があります。 　そして、その下のオレンジ色の帯ですが、経済的支援を必

	要とする児童、生徒に対して、就学援助や奨学金の貸付などの「学びのセーフティネットの構築に向けた取組みの推進」を行い、学力の向上に資するよう、事業を推進してまいります。 　次に右側の「より質の高い教育に向けた取り組み」でございますが、緑色の帯ですが、「豊かな心と健やかな体の育成」として、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーを活用した、いじめや不登校の対策を実施いたします。その隣の、黄緑色の帯ですが、支援員の配置、特別支援学校の整備を進めまして、「共生社会の実現を目指すインクルーシブ教育システムの推進」を行ってまいります。次にその下の左側のピンク色の帯「地域と学校・社会教育施設が協働する教育の推進」でございますが、来年度も引き続きまして地域と学校パートナーシップ事業やふれあいスクールなどを実施してまいります。次にその隣の赤色の帯でございます。「校種間・学校間連携を活かした特色ある学校・園づくり」でございますが、こちらについては小中一貫教育や、幼・保・小連携を推進いたします。次にその隣の「ニーズと課題に応える教育行政の創造」では、新潟市版コミュニティスクールや、学校適正配置についての検討を進めるとともに、教育ミーティングを各区で引き続き実施してまいります。 　最後の柱ですが、下段の「働き方改革・環境整備」についてでございます。これまで説明をいたしました「学力の向上に向けた取り組み」や「より質の高い教育に向けた取り組み」の土台としまして、学校、ＩＣＴ環境の整備や、校務支援システムの構築に取り組むほか、学校事務の支援員や部活動指導員の配置などによる多忙化解消の取組みを推進していまいります。 　平成３１年度の主な教育施策につきましては以上となります。本日は、図の一番左上の「学力の向上に向けた取り組み」に特に焦点を当てまして、テーマとさせていただきたいと考えております。詳しい内容につきましては、これから、学校支援課長からご説明がございます。
○市　長	ありがとうございました。 　引き続き、「新潟市の学力向上に向けた取組について（案）」について、事務局から説明をお願いします。
○事務局（学校支援課長）	学校支援課長、齋藤です。新潟市の学力向上に向けた取組みについて説明いたします。 　資料２をご覧ください。さまざまな学力向上に向けた取組みがある中で、本日は、１ページをご覧ください。日々の授

業に特に関連の深い取組みを、学力向上プログラムとして再構成いたしました。ここ数年、全国学力・学習状況調査において、新潟市の児童生徒の学力は、政令市の中でも高い位置にあります。市内各学校でも、日々の授業改革に取り組んできた成果だと受け止めていますが、その学力をさらに向上させるプログラムと考えています。

左側の１から３の取組みは、これまでも推進し、学力向上に一定の効果があり、今後継続していく内容です。右側の４と５は、現在も取り組み始めておりますが、２０２０年度の小学校、２０２１年度の中学校の新学習指導要領全面実施に向けて、今後、重点化していく取組みです。さらに、６「学級の支持的風土の醸成」は、学力向上の基板として、来年度から重点化してまいります。

一つずつ説明いたします。２ページをご覧ください。

新潟市では、全国学力・学習状況調査を、小学校６年生、中学３年生が対象ですけれども、この調査、そして新潟市独自で行っている中学２年生対象の学力調査、理科と英語です。そこに小学校３年生から中学校３年生まで行っているステップアップＷＥＢ配信などの学力調査に基づいて、それを教育委員会で市全体の傾向を分析し、それに基づいて、各学校でもさらに分析しています。落ち込んでいる児童生徒がいる場合、授業で取り上げたり、個別指導をしながら、学力向上を図っております。

３ページをご覧ください。先ほど申し上げたとおり、新潟市はこのように、全国学力調査で、政令市の中でも上位に位置しております。左側が小学校、右側が中学校です。一方、課題もありまして、市全体の課題としては、中学生の家庭学習時間が多くないという課題も出ております。

４ページをご覧ください。学力を分析し、対応しながら、授業を変えていきます。今年度および来年度の重点としてはこの三つをあげて取り組んでいます。「新潟市の授業づくりの推進」、「ノート指導の充実」、「家庭学習」の充実です。先ほど、この家庭学習の課題があるということで取り組んでいます。

５ページをご覧ください。このようなリーフレットを作成しまして、全教職員に配布し、事業の徹底を図っております。

６ページです。特にこの「新潟市が目指す授業づくり」ということを、どの学年、どの教科においても徹底して行おうということで、今、全市で取り組んでいます。「何を学んでいるのか」という学習課題を、授業の際、冒頭に確認し、「何が

分かり、できるようになったのか」ということを学級全体でまとめ、一人一人がどのように学んできたのかを振り返ります。６年前から始めまして、浸透してきましたが、今後も継続しながら、質の向上を目指していきます。

７ページをご覧ください。さらに学習支援の充実にも取り組んでいます。アフタースクール学習支援事業、放課後の学習です。全中学校で数学が一部、５３校ですけれども、全中学校で数学、英語のアフタースクール学習支援事業を行っております。生徒の学力向上に役に立ちましたかというアンケートについて９４．３パーセントの学校が役に立ったと応えております。

８ページです。市内の各大学と連携しながら、将来、教員を目指している大学生の力を借りて、学習支援ボランティア事業を行っております。今年度は８１校園、１９０人のボランティアが、述べ３，５５７回のボランティアをしております。

９ページです。さらに、観察、実験等の準備、後始末等が大変な理科の学習を支援する支援員を配置しております。毎年３０、４０校の学校に支援員を配置しております。

１０ページをご覧ください。ここからが、今年度からさらに重点をおいている取組みです。これは文部科学省が示した外国語教育にかかる抜本的強化のイメージ図です。小学校３、４年生での外国語活動導入、５、６年生での外国語教科化にともない、学年、校種間の連携がより一層求められています。

１１ページをご覧ください。各校種別の取組みですけれども、小学校においては、２０２０年度の新学習指導要領全面実施に先駆けて、既に今年度から新学習指導要領の時数で先行実施を行っております。中学校、高等学校でもＡＬＴをやっておりますが、特に小学校にたくさん入れるようにということで配置の工夫をしております。さらに、研修会で実際の授業の映像を見せたり、資料をＤＶＤで配布するなど、最新の情報を提供しています。中学校では、学校支援課で作成した教材を配信したり、新学習指導要領を見据えた授業実践について共有しています。高等学校では、大学入試改革を見据えて、生徒の外国語の外部検定の受検補助を行ったり、中学校から異動してきた教員の研修の充実を図っております。さらに市内全学校に、外国語教育に関する情報を定期的に発信し、各学校の優れた実践を共有しています。

１２ページをご覧ください。ＩＣＴ教育の推進と環境整備です。現在、市内の学校でタブレット端末や液晶テレビ、電

子黒板等を利用した授業が展開されています。右上の写真は小学校外国語で、デジタル教材を液晶画面に映しながら、楽しく体験的に学んでいる様子。右下は、中学校体育で動きをタブレットで撮影し、再生しながら話し合いを行っている様子です。左側は、高等学校で電子黒板に書き込みながら分かりやすく授業を進めております。ＩＣＴ機器を有効に活用しながら、児童生徒の学力向上に結び付けていきたいと考えております。

１３ページをご覧ください。ＩＣＴ教育の環境整備として、来年度、教育ネットワークの整備を行います。これにより、学校同士がネットワークで結ばれ、学習状況等の提供など、学習環境を向上させます。現在導入されているタブレット端末の台数を増やしていきたいとも考えています。無線ＬＡＮのアクセスポイントを増やすなどして、環境を有効に活用し、児童生徒のアクティブ・ラーニングを推進していきます。併せて、デジタル教材の活用を促進し、たしかな学力向上に努めていきます。

１４ページです。支持的風土とは、互いに認め合い、助け合い、期待をかけ合い、高め合う温かな学級の雰囲気のことです。支持的風土が必要な理由を３点挙げましたけれども、特に３点目。私たちはこの支持的風土は、学力向上になくてはならないものと捉えております。支持的風土は日々の生活と学習の中でつくられていくもので、人間関係と学力はともに高まっていきます。この二つを同時に高めていく必要があります。この支持的風土の醸成のためのポイントについては、来年度、校長会や学校支援課だより等で取組みの具体を提示していきます。

最後、１５ページです。以上のように、これまで推進し、今後も継続する内容に加え、２０２０年度から随時全面実施となる新学習指導要領に対応した外国語教育、ＩＣＴ教育など、新しい教育課題に対応するとともに、学力向上のための基本となる学級の支持的風土の醸成について取り組んでいきます。これらの取組みは学校と教育委員会のみで進めていくものではなく、家庭、地域、行政、社会教育機関、地域の諸団体、企業、そして学校が一体となって、すなわち学社民の融合によって支えられていると考えています。地域の支えを基盤に、家庭の安定、学校学級の安定があってこそ、子どもたちも安定します。その上で、さまざまな取組みを継続的、重点的に推進するからこそ、新潟市の学力がさらに向上していくと考えております。

○市　長	ありがとうございました。 学力向上のために、これまで継続して取り組んできた内容を説明していただき、さらなる学力向上のために来年度からより重点化して取り組むものを説明していただきました。 それでは、皆様から、今後の重点化する取組みの方向性などについて、ご意見をお願いしたいと思います。発言のある方は挙手をしてください。
○田中委員	お願いいたします。１０ページを開いていただきたいと思います。先ほど、齋藤課長の説明の中で、文部科学省のイメージ図だということであったわけですけれども、左側が現状と、それが新たな外国語教育ということで右の方へと。新潟市はこれを先取りした形で進めていますという話があったと思うのです。 この外国語教育については本当に重要だということは皆さんも重々承知されていると思うのですが、例えば産業能率大学という大学があるのですけれども、そこでは隔年で新入社員を対象にしてグローバル意識調査をやっているのです。一昨年、２０１７年の調査によりますと、学校でやった英語教育が役立ったかという問いかけがあるのです。それに対して、読む、聞く、書く、これが半数以上が役立ったといっているのだけれども、話すということについては４割程度しか役立っていないと回答されています。また、海外で働きたいと思うかという質問もあるのです。これに対しては、６割以上が働きたいと思わないと言っているのです。グローバル意識で。新入社員です。なぜかというと、自分の語学力に自信がないからというのです。 これは隔年で調査、同じようなことを聞いているのですが、同じ傾向なのです。 これを読んでみて思ったのですが、外国語教育で大事なのは、やはり話すとか聞く。私など中学校時代を思い返すとジス、イズ、ア、ペンと言って、よく分からないことを勉強するところからなのですけれども、本当に今の子どもたちというのはコミュニケーションを取っている。特に、この新潟市の小学校などはそうなのですけれども、外国語活動を通しまして、歌やゲーム、それから簡単な会話などを中心とした外国語によるコミュニケーション能力を高めてきたのです。これがやはり中学校にしっかりと繋がっていく。 先ほど齋藤課長、学校種間の連携が大事だという話をされましたけれども、小から中へ、中から高へというここの繋がりを大事にしていく必要があると思っています。

そこにも書いていますように、中学校で、対話的な活動を重視していくということで、今後の中学校では、オールイングリッシュで授業をやるという方向にいくわけですけれども、やはりこのコミュニケーションというものをぜひ大事にしていく必要があると考えています。

例えば、そのために地域の英会話教室と連携するとか、あるいは大学で英語を専門としているような学生さんをボランティアとして招くとか、このようにしてこの幅広い外国語教育を推進していく必要があるのではないかと感じております。

○山倉委員

続きまして英語のことなのですが、小学校の３、４年生の一番下に「外国語に慣れ親しませ」と書いてありますが、まず、外国語が好きになってもらいたい。嫌だな、ではなくて、外国語を楽しく学んでもらいたいということで、ここに「週１コマ程度」と書いてありますが、楽しく学ぶことには何があるかと考えたときに、総合的な学習のときなども、例えば絵本の読み聞かせなどもイラストが入った分かりやすいものを英語で読んだり、例えば友達とゲームをしたり、そういうときに英語を使うことによって、ああ英語は楽しい、外国語が楽しいな、好きになってもらえるなということが、授業だけではなくて、普段の総合的な中でも、他の授業の中でもできるのかなと思って、これを見ていろいろ思いました。

まず好きになって楽しく授業ができたらいいなと思います。

○上田委員

英語もそうなのですけれども、英語を授業として勉強するということも大切なのですが、あと、英語を使って海外の人とコミュニケーションを取れる楽しみとか、英語を使って、先ほど田中委員から仕事の話も出ていましたけれども、仕事に活用して成功というのもあれなのですけれどもこういったことができるとか、あと、英語を使って自分の趣味にも活かせる、海外を旅行するとかそういう楽しみとか、英語を勉強して学んでいくとそういう夢や希望も広がっていくというような話も少し取り入れながら授業を進めていければいいかと思いますし、ＩＣＴ教育のこともそうなのですけれども、実は私の娘が今アイルランドに住んでいて、ラインで、電話でやり取りが簡単にできてしまう、あとスカイプとか。

これから、この先授業が整ってきたらなのですけれども、例えば時差の少ないオーストラリアとかの学校とこちらの新潟の学校と結んで文化を話し合ったりとか、英語でコミュニケーションを取るとか、行く行くはそういったようなことも

	授業としては面白いと思いますし、子どもたちも興味を持てるのではないかと思いました。
○市　長	では、渡邉委員。
○渡邉委員	10 ページの図の所の現状で、学年が上がるにつれて意欲に課題があるということが確かにあると思います。その背景には、外国語を難しいと感じる子どもが、やはり学年が上がるにつれて増加していて、例えばある期間学校を休んでしまって、また学校に戻った場合に顕著だと思うが、知識の差がとても大きくなっていて、同じ授業内容についていくのが難しいということがあると思います。新らたな外国語教育ということになって、言語活動ですとか対話的な活動というものが多くなっても、その中でうまくできない体験が、周りの子にも見られることになりますし、その中で失敗するし、恥ずかしいということで、消極的になってしまう子どももいると思います。必要な子に個別に先生方が働きかける、援助してあげることが大切になると考えますと、今も実施しているかと思いますが、英語の授業の時にはより少人数のクラスにするとか、複数の先生で、先程田中委員が言われたような、外部の方に入ってもらうのも１つのアイデアかと思いましたが、メインになる先生と他の方が入って身動きがとりやすい形で対話活動や言語活動ができるとか、差がとても大きくなっているという事でしたら、習得度別のクラスを取り入れるとか、そういった広め方ができると良いと思いました。そうなると先生の数などいろいろな問題が出てくると思いますが、そのような中で対話的な活動を行っていけると英語面白いなと思う子どもも増えて学ぶ意欲も高くなるのかなと思いました。
○　市　長	ありがとうございました。では小野沢委員。
○小野沢委員	外国語、会話ができたら本当にいろいろ広がると思うのです。そういう点で、子どもたちが外国語を学ぶ、そして会話が出来るようになるということは理想だと思います。 その衝撃、何が今まで、それこそ９年やった、それに加えて４年加えてまだやった、なぜできないのかというと、恥ずかしさということがあると思うのです。こんなことを言ったら笑われるのではないかというようなことを考えて、事前に頭の中で作文をし、そこに文法を加えてというようなことが始まると、どんどん英会話というところから離れていってしまうので、導入部分の小学校低学年のところで、いろいろな単語を並べていって、みんな通じるんだよというような、ゲームを通したり歌を通したり、そして単語を並べてもちゃんと外国の先生に通じたというようなところの達成感とか、そ

	こをみんながそれを楽しめるような、恥ずかしいということをまず、これを言ったら恥ずかしいがない英語の会話の授業を作っていただけるといいのかなと思います。よろしくお願いします。
○市　長	ありがとうございます。佐藤委員。
○佐藤委員	今ほどの小野沢委員のお話に付け加えなのですけれども、今回、教科としては３年生、４年生から外国語活動が始まると。今小野沢言委員が言ったように、このイメージとしては、幼稚園くらいの子どもたちが何の失敗も恐れずにいろいろなことにチャレンジするような、その姿が、やはり子どものあるべき姿なのですが、それがそのまま大人にいければすばらしい人間に育つのではないかと思っています。 その中で、市長も幼・保・小の連携ということ又は小中の一貫教育ということ、いろいろ考えていらっしゃると思いますけれども、教科としては３、４年から外国語が入ってくるわけなのですが、幼保小の連携の中で、外国に触れるような何か、教科ではないけれども触れるような活動を取り入れるようなことをしていけば、小野沢委員がおっしゃったように、失敗を恐れないような子どもが育っていくのではないかと思っています。
○市　長	ありがとうございます。沢野委員、お願いします。
○沢野委員	今まで皆さんのお話を聞いていて、本当に、まさにそうだなという、同じような気持ちをたくさん持ったのです。それで思い出したのが、娘が小学校３年生のときでした。こんなふうに英語教育を小学校からという前だったのですけれども、たまたま担任の先生が留学経験のあった先生で、授業の中で少し歌と踊りというか、体を動かしながら英語の歌で楽しむということをはさんでくれたりとかしたときに、とても楽しそうにやっていまして、帰ってきて話を聞かせてくれたりとかしたのですが、そういう意味では、一番下の「外国語に慣れ親しませ」ということが一番、まずは大切なのかなと。その楽しさを知った上で、英語あるいは外国語を使ったことによって、どのようなことが得られるのかとか、どのようないいことがあるのかとか、何か目的を見つけ出せると一番いいのかなと思います。 そんな娘が中学に上がりまして、連携がほしかったなという部分では、日本人なのになぜ英語を話さなければいけないのというような極端な意見を持つようになってしまいまして、そういうところでは、親しんで、楽しさ、その中でいろいろなものが、異文化を知ることができたりということにな

	るのでしょうけれども、いろいろなものを得られるというか楽しいことがあるという、何かそういうことを見つけるような、あるいは連携をうまくできたらいいかなと思いました。
○市　長	ありがとうございました。市嶋委員。
○市嶋委員	ＩＣＴ教育について意見をさせていただきたいと思うのですけれども、まず、このタブレットを使ったりパソコンを使ったりというＩＣＴ教育というものについて、本当に、文部科学省のホームページにも非常に効果の高い学習方法だということも実績として載っているのも確認いたしましたし、また、会社に入ったり就職した上で、今、ＩＴ環境がない状態というのは多分ほとんどないのが現状かと思います。 その中で、まずは率直にこの今の設置台数についてなのですけれども、私が聞いた限りでは、小学校は１校当たり１６台、中学校は１校当たり同じくらいの台数が既に設置されているということで、なかなか財政状況の中で進めていくところで難しいところもあるかもしれませんけれども、子どもがこれから社会に出ていくにあたって、またこの中で効果的な授業を行うにあたって、まずこの設置台数にある程度こだわって、しっかりと学校の中でこのＩＣＴ教育の環境を整えていくということを新潟市全体で取り組んでいくことをぜひお願いしたいと、私は個人的に思っております。社会に出てパソコン、タブレットを使えないという子どもが大人になるというよりは、早いうちからそういった環境に慣れて、それを効果的に使えるような状態で成長していくということ、そのためにはこのＩＣＴ教育の環境整備というところもぜひ力を入れるべきところではないかと感じています。 また、運用についてなのですけれども、一般的に大きな会社などですと、そういったシステム部門というようなものがあって、トラブルがあったときですとか使い方であったりとか、そういったところを全面的にサポートしてくれるような機関なり部門なりがあったりするかと思うのですけれども、この学校現場で先生方にあまり使い方とか設定とか、環境の部分まで少し負荷を掛けてしまい過ぎると、やはり業務負荷というところで先生方が大変になってくるということも懸念されると思いますので、そういった相談窓口を用意するとか、そういったＩＣＴの環境、進んでいく中で出てくるいろいろな問題に対応できるような部門もぜひご検討していただくとよろしいのかなと感じました。
○市　長	はい、佐藤委員。
○佐藤委員	ＩＣＴという中で、タブレットを授業で使うという中で、

理想的には一人１台という時代がいずれ来るだろうと思います。ただ、そうしたときに懸念されるのが、いいこともあれば悪いこともあると。子どもたち同士の中で、何かしら、簡単に言ってしまえばいじめに使われたりという可能性もありますので、その辺の対応ということも事前に考えていかないと悪用されるということもありますので、その辺も検討課題として入れておくべきかと思います。

○市　長　　ありがとうございます。田中委員。

○田中委員　　先ほど市嶋委員が言っていらした対応部門ということ、おそらく、これは今後の話になってくると思うのですけれども、例えば、学校教育とはいいながらも、ＩＣＴについては現場の先生たちだけの力では無理ですので、例えばそういう市長部局のほうのＩＣＴといいますか、ＩＴ部門が一緒になって、ドッキングしてやっていくとか、あるいは熊本市などですと先生方の研修とかあるいはこのシステムに対するいろいろな対応として、ＮＴＴドコモと連携しながらやっているのです。そうやって外部の情報専門機関と連携していくとか、そういうことも視野に入れてもいいのかもしれないと思っています。

○市　長　　はい、ありがとうございます。

○佐藤委員　　今まで話題に出てこなかった、最後のほうの支持的風土の醸成というところなのですが、これ、そういう風土を作ろうということを考えた段階ということで、具体的にはどうしようということは現段階では内容が決まっていないようなのですけれども、社会に出たときに、やはりものごとを実現しよう、成功させようと思ったときに、やはり一人ではできないわけで、市長も本日おっしゃいましたけれども、子どもたちが自分の夢を実現する力を付けるために、これ、自分の力だけではなくて、やはり周りのサポート、助けということが必要だと、必ず必要になってきますので、やはり子どもの頃から学級での活動や、学習面においても、お互いに助け合うような、尊重し合う、そういう意識というものを醸成するということは本当に大事なことだと思います。ぜひこういう部分を、学力も大事ですけれども、その礎としてこういう取組みをしていくべきだと思いました。

○山倉委員　　同じ、支持的風土のことについて。最初にこれを見たときによく分からなかったので、図書館でいろいろ調べたのですが、とてもいいことがたくさん書いてあって、ああすごくいいことなのだなと思いました。

今、テレビなどを見ていると、「死ね」とか「ばか」とか、

「本当にどっか行け」とか「うざい」とか、とても乱暴な言葉がたくさん出てきて、それを日常的に子どもたちが聞いて、ふざけて使ったりしています。でも、そういう言葉を使うと、やはり気持ちが悲しくなったり元気がなくなったりする。そして、「ありがとう」とか「おはよう」とか「お願いします」とか、そういう言葉を友達に使うと、嬉しくなったり元気になったりするということを、教師や友達からこうだと言われなくても、子どもたち自身が気づいてそういう言葉を掛けるとか、得意、不得意が必ず人間はありますから、そういう中で、不得意なことをフォローしてやろうとか、やはりそこには想像力が要るのではないかと思います。友達が、こう言ったら嫌かなとか、ここが不得意だからこうしたら助かるかなと、やはり子どもたちは想像力を働かせながら、友達同士でフォローし合いながらいいクラスを作っていくということは、本当にこれから大人になるうえで、本当に生活していく上でとても大切なことで、いいことなのだなと思いましたので、これはぜひ、少しずつ広まっていくということなのですが、ぜひこれは進めていただきたいと思いました。

○小野沢委員　同じく、支持的風土ということなのですけれども、１５ページに学・社・民の融合、学級の安定、家庭の安定、子どもの安定とあって、その上に１から６まであるのですが、この学級の支持的風土の醸成というのは、大きな枠になってここに載っていてもいいのかなと思えるくらい、とても大切なことだと思うのです。今、山倉さんもおっしゃったように、得意、不得意がみんなありますし、この中に、「互いに認め合い、助け合い、期待をかけ合い、高め合う温かい学級の雰囲気」とあるのですけれども、この中の助け合いというような中に弱音を吐けるという、自分が今辛いとか、そういう弱音を吐けて、それをフォローしてくれる人がいるというようなことがすごく気持ちを強くしたり、何かを成し遂げていく上では大切だと思います。ですから、この学級の支持的風土の醸成、これはまず進めていただきたいことと、併せて、これを目指すのであれば、学校内の支持的風土といいますか、先生方の、教職員の間でもまさに支持的風土の醸成というところで、みんなが、困ったことも言い合えたり、弱音も言えたり、フォローし合えたり、お互いに期待をして、高め合えたりという、学校自体にもこれを、この活動といいますかこの動きを広めていただきたいと思います。

○市嶋委員　支持的風土の醸成についてなのですけれども、まず支持的風土というところの前提として、やはり保育園から小

	学校の１年生にあがったときに、どのくらいそのクラスの雰囲気がそういったものになっているのかという、そもそも、子どものころからの成長過程に一番まず始めのその原因があるのではないかと、今、自分がそのくらいの子どもを育てていますので、じっとして話を聞かないとか、座っていられないとかという状況というのは、まず保育園とかその辺りの年のころにしっかりとできるようにしておかないといけないことかなと思っていました。 　その中で、やはりこの支持的風土の醸成に欠かせないのは、学校の教育もそうなのですけれども、まず絶対、家庭教育の中で話を聞くとか、座っていられる状況を一緒に作って、保育園なりが作っていかないと、そういったものというのは、醸成というくらいですから、全体でそういったものを作っていかなければいけないと思います。 　その中で、保育園も、市長の冒頭のごあいさつで言っておられましたけれども、幼・保・小の連携等で、しっかりと保育園のうちから、例えば今認定こども園とかいろいろ増えていると思いますけれども、私の通わせている保育園では、ヒアリングで、座らせて授業を、保育園のカリキュラム、詳しく分かりませんけれども、いつくらいから座らせてやっていますかというようなヒアリングがあったりしたそうです。そのくらい、多分、各保育園で、そういったことにばらつきが今あるのが現状かと思いますので、そういった、座って何か決まったものの中で、こういった支持的風土の醸成というものは、保育園から連携しながらやっていくことが大切かと思います。 　また、最後に、家庭であったり保育園であったり、いろいろな人がかかわって支持的風土というのは作られていくということを考えると、私はこの支持的風土という言葉自体が分からなくて、調べて始めて分かったところもあって、私が不勉強なだけだと思うのですけれども、少し平易な言葉というか、分かっていただきたい人たちがみな分かるような書き方で、ここから先は落とし込んでいっていただけるともっと具体的に動いていけるのかなということで、意見でした。
○市　長	なるほど。田中委員。
○田中委員	先ほど小野沢委員から、学校全体でもというようなお話がありました。けっこうそういう学校は多いのですけれども、例えば心地よい言葉を、「ぽかぽか言葉」とか、「ふわふわ言葉」という言い方、多分皆さん聞いたことがあると思うのです。そのように言いながら、子どもたちに分かりやすい平易

	な言葉を使ってやっているところは多いです。 　私はやはり、この支持的風土のことを考えていたときに、子ども同士が相手のいいところを見つけて、お互いに認め合うとか賞賛し合うということがとても大事だと思うのです。人に褒められるとか、認められるという経験というのは、必ずその人の心を豊かにして、そしてそれが大人になってもやはり小さい頃の思い出が生きてきて、その人、その人の人間性にずっと大きくかかわっていくと思うのです。ですから、支持的風土と言わなくても、本当にお互いに認め合うとか、思いやりを持つとか、そういう言葉を大事にしながら、子どもたち一人ひとりが自信を持っていく。そして、どの学級からも、どの学校からもいじめがなくなると。そんなことを進めていけるといいのかなと。まさに市内のどの学校も、あるいはどの学級でも思いやりの気持ちが満ちあふれて、温かい言葉とか、あるいは温かい眼差しがどんどん増えていく。そんな学校になっていったらいいなと思っています。
○市　長	ありがとうございます。渡邉委員。
○渡邉委員	今の田中委員の言われたことを聞いてまた思ったのですけれども、子どもがお互いに聞いて認め合うということは、少し違う視点から言うと、相手、その考えは間違っているとか、おかしいとかというような評価を加えないで聞くということかなと捉えました。 　そういったことが大事なんだよということを教えることと、あとは実際にそういうふうに聞いてもらって体験できるということが、そういった子どもを育てるのかなと感じます。 　そう考えたときに、やはりそれぞれの先生が優れた聞き手のモデルになれるということが大事かなと思い、１４ページのポイントを見たときに、校長会などで取組みの具体を提示しますということですので、校長先生がまずはモデルになり、学校の先生方ともそういった関係や風土を作り、各クラスで子どもたちのモデルになるというようなことができたら、本当にいいなと思いました。ぜひ取組みを続けていけるといいのではないかと考えています。
○市　長	ありがとうございました。 　今ほど、三つの問題についてそれぞれ委員の皆さんからご意見をいただきまして、大変ありがとうございました。 　まず、外国語教育の充実について、委員の皆さんから、体験に基づいて非常に説得力のあるお話をいただいたいと思っています。私も、グローバル化が進んでいまして、これまでの学問としての英語から、やはり実用としての英語が今もと

められていると認識しております。新潟市教育ビジョンで掲げております学力、体力に自信を持ち、世界と共に生きる子どもの育成を目指す上でも、外国語の授業の充実、特に先ほどからご指摘があります「話す」、「聞く」、こういう点の充実がますます重要だと考えています。小学生の早い段階から、英語に慣れ親しむこと、そして日本人の場合は特に抵抗感といいますか恥ずかしがったりするところがあるのですが、楽しみながら英語を学ぶこと、こういうことがやはり重要だと思います。

また、中学、高校など、会話的な言語活動を重視した、コミュニケーション活動を行うということ。とかく日本人はコミュニケーションという点で、他国に比べてどうしても劣ってしまうというような点がありますので、非常にコミュニケーション能力ということが求められていると思います。そのために、渡邉委員からも数々ご指摘をいただきましたけれども、先生方の英語力です。それから人数等、習熟度というお話もありましたけれども、学校の体制というものも強化していかなければならないと、そうした重要性を認識させていただきました。

また、成長過程において、失敗した経験によって子どもたちの積極的な姿勢が徐々に弱まってくことが懸念されるわけですけれども、間違ったことをクローズアップするのではなくて、できたことを褒めるということ。また、喜び合う指導というもの、これが大切だと考えています。幼稚園、保育園の先生方の褒めて育てる教育を、小学校、中学校にも取り入れられたらいいのかなと思ったところです。

そして、次にＩＣＴ教育の推進ですけれども、子供たち一人一人が日々の授業の中で、友達と協力してタブレット端末などのＩＣＴ教育、機器を活用する機会をさらに増やす必要があると感じました。新潟市には予算には限りがありますので、現行の機器、ソフトウエアの削減や低価格なものへ変更を行うなど工夫をしていきながら、ＩＣＴ教育の充実を図っていきたいと考えています。

また、ＩＣＴ機器を使い互いの考えを見える状態にして議論をしたり説明をしたりする活動、こういう学習を非常に分かりやすいものにしていくと思いますので、子どもがそれぞれ関心のある内容を個別に調べて学ぶ活動は子供の主体性を高め、学力の向上にもつながると考えています。学習指導の効果をさらに高めるため、効果的なＩＣＴ機器の活用方法の検討を進めていきたいと考えています。

	最後に学級の支持的風土の醸成ということですけれども、皆さんから大変貴重なご意見をいただきました。互いに認め合い、助け合い、高め合う温かい学級の雰囲気があってこそ、子供たちが安心して学び、心も安定し、学力も向上していくということが分かりました。また、いじめの未然防止にも大いに関係があると痛感をいたしました。学力の向上には、学校における互いに認め合い助け合う支持的風土が必要であることとともに、家庭や地域において子供たちを支えていくことが非常に重要であると考えています。教育の大綱で定めております学・社・民の融合による教育の推進に向け、全市一体となった取組みを教育委員会と市長部局が連携して深めていきたいと思います。 以上を私のコメントとさせていただきます。そのほか、皆様からのご意見がございますか。それでは、今日の皆様からのご意見を踏まえて、教育長から一言お願いします。
○教育長	最初に学校支援課からの説明もありましたように、新潟市はさまざまな取組みを進めてきて、学力はかなり向上してきていると思っています。 学力を向上するために、やはり学習意欲を持ってもらうということが必要であって、子供たちに先ほども楽しくというような話、ご意見がいろいろ出ていましたけれども、やはり子供たちに学ぶことの楽しさだとか、分かることの喜びを感じてもらえるように、また引き続き事業改革の推進などに積極的に取り組んでいきたいと思います。 そして、更なる学力向上に向けてということで、進学指導要領への対応など、またこれからの社会に必要な力の育成にも一層力を入れていかなければならないと思っていますし、併せてやはりこれからの社会を生きていく力をつけるためには、いわゆる学力だけではなく、多くの人と一緒になってよりよくその課題を解決していこうという、そんな力をつけることが必要であり、支持的風土というのがありましたけれども、やはりお互いを認め合う、尊重し合う学級づくり、学校づくりに努め、そして間違えることを恥ずかしいと思わないような、そんな安心して伸び伸びと学習できる授業づくり、環境づくりも進めていきたいと思います。 また一方、学校現場は新学習指導要領への対応をはじめ、子供の問題行動の増加や保護者ニーズの対応化など、非常に教員の多忙化が進んでいて、本当に教師が子供たちの実態を把握して教材研究したり、授業のやり方を工夫したりする時間の確保に向けて、多忙化の解消に積極的に取り組んでもい

	かなければならないと思っています。教員を増員するということは現実的には非常に困難な状況ですし、また学力は生活習慣と相関があるとも言われているように、やはり学校だけが頑張って学力向上ということが実現できるものではないと思っています。保護者や地域の皆様をはじめとして、やはりさまざまな人たちにかかわっていただきながら、みんなで一緒になって子供たちを育成していかなければならないと思っています。本当に子供たち、すべての子供がしっかりと基礎的な学力を身につけて、夢や希望を持って健やかに成長できるように、この学・社・民の融合による教育を一層進展させて、オール新潟で子供たちを育んでいきたいと思います。
○市　長	ありがとうございました。本日は、私が就任してから第１回目の総合教育会議でした。会議の冒頭に申し上げましたとおり、子供たちが将来自分の夢を実現するためには基礎学力の向上が必要であると考えています。そのためには、学校だけではなく、家庭や地域での取組みにより､子供たちを支えることが重要であり、教育の大綱でも定めている学・社・民の融合による教育の推進を全市一体となって取り組むことが重要であることが確認できました。 それでは、本日の会議の議題はすべて終了いたしました。進行を事務局にお返しします。
第３　事務連絡	
○司会（地域・魅力創造部長）	本日は、活発なご意見交換をいただき、ありがとうございました。 次回の会議日程につきましては、後日、日程を調整させていただきます。 本日は以上をもちまして、平成３０年度第２回総合教育会議を終了いただきます。本日は誠にありがとうございました。